

ジャパン・スポットライト 2018年3/4月号掲載（2018年3月9日発行）（通巻218号）

英文掲載号 <https://www.jef.or.jp/jspotlight/backnumber/detail/218/>

尾澤 章浩 氏（株式会社ベネッセコーポレーション 英語・グローバル事業開発部

グローバルラーニング課 Route H 責任者）

コラム名：Cover Story

（日本語版）

日本の最優秀の学生は海外の名門大学留学を目指す

インタビュー（2017年12月7日実施）

<ベネッセの活動紹介>

——まずは、簡単に御社の手掛けている事業内容を教えて下さい。

ベネッセという社名は、ラテン語の bene（よく）と esse（生きる）を組み合わせた造語です。「よく生きる（Beness）」を理念としている会社で、赤ちゃんのときからそれぞれのライフステージに合せた問題解決の支援を提供しています。妊娠出産期であれば、「たまごクラブ」、「ひよこクラブ」といった雑誌で、新米ママの不安を取り除く出産や育児に関する情報を提供しています。就学児向けには小学校から高校まで、学校の指導要領に沿った形の通信教育で、塾よりもリーズナブルな学習手段を、社会人向けにはベルリッツの語学教育を提供しています。また、現在は介護・保育事業も手掛けています。創業は1955年設立の株式会社福武書店で、60年代は模擬試験事業、70年代は通信講座「進研ゼミ」などの事業で拡大。1995年に社名を「ベネッセコーポレーション」へ変更し、現在はホールディングス制をとっています。通信教育事業では、中国、韓国、台湾などへの海外展開も行なっています。

——中国への展開は、現地駐在の日本人を対象としているということですか？

いえ、現地の子どもたちを対象に、現地の言語での情操教育事業を展開しています。海外事業は、中国、韓国、台湾で展開していて、現在、他国への展開を準備中です。中国の会員数は100万人を超えています。そんななかで、通信教育だけでなく塾事業も展開しているのですが、「Route H（ルート エイチ）」は少し特殊な塾として展開しています。海外のトップ大学への留学を目指すことへ特化した塾で、「Route H」の H は、「ハーバード」を意味しています。

<Route H とは？>

——Route H と尾澤様の関わりを教えてください。

Route H は、2008年に立ち上げた事業ですが、当初私は岡山本社にいたので、部分的に関わっていて、立ち上げ直後に東京に移り担当になりました。外国人が講師を担当しますが、

それ以外の運営全般、教務、指導を担当しています。塾の運営がメインですが、海外留学に関するイベントも開催しています。というのも、そもそも海外へ行って勉強することがどうということなのかご存じでない方も多いですし、海外の入試がどうなっているのかわからないという人もいます。そういったことを案内するイベントを年数回開催しています。また、熊本県の教育プログラム「海外チャレンジ塾」の運営を受託し、こちらからも留学生を輩出しています。Route H の塾自体は小規模で、15名ほどの教室が東京都内に1つです。生徒のうち2~3名は、地方や海外からオンラインで参加しています。

——最近の日本の若者は内向きになっていて、海外留学へ行けと言ってもなかなか行かないと聞きますが、どうお感じですか？

そこは、二極化あるいはもう少し多極化しているのかもしれませんが。家にいて内向きになっている人がいる一方で、海外へ進学したいという人もいます。海外留学へ興味を持つ要因はいくつかあると思います。1つは、親御さんが海外勤務をされていて海外大学への進学が身近だというパターン、2つ目はグローバル人材になりたいと思っているパターン、3つ目は、中国や韓国など近隣諸国の留学人数が伸びているなかで、危機感を感じているパターンなどです。親御さんや本人のどちらかがそういうことに興味があると、イベントなどへ参加して情報収集しようと思うようになります。イベントへ参加する子たちは、学校では海外留学の話題は少数派でも、イベントで同じようなことに興味をもつ子がいると分かると、あっという間に友だちになってどんどん外向きの子たちのネットワークを作っていきます。そして、知っている先輩が海外に行くと、「私も行きたい」となるわけです。

——日本企業の海外進出が増えている状況を考えると、帰国子女が増加傾向なのではないかと思われま。海外で学生生活を送った子たちが、海外の大学を目指すという傾向があるのでしょうか。

Route H の卒業生はこれまで67名いるのですが、半分強が帰国子女ですので、そういう傾向はあるかもしれません。一方で、純粋に日本教育で育ってから留学している子が半数弱いるのも事実です。海外の大学入試は、総合評価で判断されますので、受験の結果自体は、帰国子女かそうでないかという違いはそれほど影響ないと思われま。

——海外の優秀な大学というと、欧米の大学を思い浮かべますが、最近ではアジアにも優秀な大学が増えています。Route H 卒業生でアジアの大学へ進学した子もいますか？

はい、います。シンガポールにあるイェール NUS 大学へ1名、アラブ首長国連邦のニューヨーク大学アブダビ校に数名が進学しました。米大学と提携したアジアの大学は、比較的奨学金が多いというメリットがあります。また、ニューヨーク大学アブダビ校は、潤沢な資金があり学習環境も整っています。この2校は、アメリカの教授が来て授業を行なうので、アメリカの教育をアジアで受けられるという点も魅力です。アジアで活躍したいという人にはメリットがあると思います。

——アジアの大学のレベルが上がることで、段々と日本の大学のステータスが下がってきていると聞いています。シンガポール国立大学やオーストラリア国立大学とともに、中国の清華大学や北京大学、インド工科大学などが教育水準の高さで注目を集めています。今後は、中国など英語主体ではない国の大学を目指すという動きもあるのでしょうか。

現在の Route H の卒業生の進学先は、アメリカ、カナダ、オーストラリアが多いです。でも、中国の清華大学は数年前の U. S. News の世界大学ランキングの工学分野で 1 位になっていますし、MIT と提携していて意外に実践的なところもあり、今後人気が出てくる可能性はあります。少数ではありますが、親世代や祖父母世代が中国系で、自身は日本国籍という子たちが先鞭をつけています。

——海外の大学院へ留学する日本人が減っているという話も聞きます。ハーバードなどの大学院の留学生には日本人が多かった時代もあったのですが、今は日本人ほとんどいなくて、中国人と韓国人ばかりになっていると聞くことがあります。この状況が今後変わっていく可能性はあるのでしょうか。

ご存じの通り、日本から海外の大学院への留学のほとんどが、企業が留学費を負担する企業派遣でした。それが、日本の経済状況が悪化したことで激減したという状況があります。但し、我々はハーバードの大学院と交流会を開催し、毎年ジャパントレックで日本に来る学生に会いますが、そこには日本人もいますので、まったくいないわけではないと思います。Route H の卒業生で、ハーバード大学からコロンビアの大学院へ、プリンストン大学からスタンフォードの大学院へ進学した子も出てきています。社会に出てから大学院へ行く人だけでなく、大学から大学院へ進む人もでてきていますので、今後は少し増えてくるかもしれません。

——尾澤さんのお仕事は、海外の大学の入試や出願方法などを調べての情報提供がメインになるのでしょうか。

情報提供は私の重要な仕事の 1 つです。今は、ネットを駆使して調べれば分ることも多いのですが、調べ方が分からないということもあるので、冊子などを作って、どんな大学があるのか、どんな準備をする必要があるかなどを紹介しています。「海外進学 Route Book 2018 [米国版]」という冊子を発行していますが、ここには米国の難関大学のランキングや入試情報とともに、合格体験談を数多く掲載し、先輩がどんな準備をして合格したのかを紹介しています。

＜海外のトップ大学に合格するには？＞

——海外の大学の入学準備というと、英語の準備が一番大変なのでしょうか。

Route H でまとめた米国難関大合格の前提条件では、7つの項目を上げています。合否は語学力だけでなく総合評価で決まります。まず、普段の高校の成績が良好であることが重要です。次に、TOEFL や SAT などの共通テストで高スコアであることですね。さらに、課外

活動や受賞歴も問われます。受賞歴は数よりも質が重要で、国内での受賞歴だけでなく、国際数学オリンピックなど海外での受賞歴があると強みになります。ここまでは、高校 3 年生になるまでに自分で対策をしておきたいところです。そして高校 3 年生になったら、エッセイの対策を集中的に行ないます。Route H では、このエッセイの部分と SAT 対策などの指導をしています。

——エッセイは、日本の中高教育ではなかなか培われない能力かもしれないと思いますが、難しいものなのでしょうか。

仰るとおりです。先ほどの冊子で、ハーバード等アイビーリーグのエッセイの課題を紹介しています。共通願書のなかに、パーソナルエッセイを書く必要があるのですが、これがなかなか書けない子が多いのです。自分がどんな人なのかを、一番アピールしたい点に絞ってエピソードを盛り込むには、自己分析ができないと書けません。ハーバードは、約 4 万人の志願者がいて合格者は 2 千人なので合格率は 5% です。その内、留学生は 10% に満たないので、200 人に 1 人以下という割合です。その中で目立つエッセイを書くとなると、部活でちょっと活躍したことを書くだけでは難しいのです。また、プリンストン大学の小問では、一番好きな映画、本、などを聞かれますが、アンケートのように「スターウォーズが好きです」と書けばいいというわけではなく、それを好きだということ、自分のどんなことをアピールするのかを考える必要があります。

——英語の能力もさることながら、それに加えて思考能力が必要ですね。

いろいろな思考力が求められます。「暇な週末に何をしたいですか？」と聞かれたときに、何と答えるかと考えたとき、ある意味何でも書いてしまいますので、そこは思考力というかクリエイティビティを求められます。論説文ではないので、ストーリーテリングと言っていますが、自分のストーリーを語れることが重要になります。

——何年生から通っている子が多いのでしょうか。また、理想としては何年生から通った方がいいと思われていますか？

結果的には、高校の 2 年 3 年になってから通っている子が多いです。それは、先ほどの米国難関大合格の前提条件のところでもお伝えしましたが、塾で習うこと以外に自分で進めることが多いからです。ただ、理想を言えば、早めにどんな準備をすればいいのかを知って、計画的に始めた方がいいでしょう。中 2 や中 3 から準備を始めた方がいいと書いてある書籍もあります。

——日本の教育は、どちらかというとマス教育という汎用品を作るような傾向があると思うのですが、海外の大学は個性が光る人を求めているとうことでしょうか。

ハーバードの求める人材を調べて、冊子の中で紹介していますが、多様性を重視し多様な人を集めていることが分ります。どれか 1 つだけ突き抜けている人も、いくつかの要素を満たしている人も合格した実績があるので、いろんなタイプの人を採用しているなど感じま

す。世界の入試を全て知っているわけではないですが、この傾向はアメリカが1番高く、イギリスやカナダはそこまで課外活動を求めてなくて、比較的点数が良ければ入れる傾向があります。

<今後の見通し>

——海外のトップ大学を目指す日本人は今後増えていくのでしょうか？

文部科学省が出している米国への留学生の数は、2015年度で1万9千人弱でした。バブル経済が崩壊して以降この数字は減少傾向でしたが、2012年くらいに底を打って上がってきている感じがあります。内訳など細かな数字は分らないので、学部生と大学院生の比率などは分かりませんが、Route Hに関わりのあるハーバードでは、3年くらい前に比べて、日本からの出願者が倍以上増えていると聞きます。

また、ユニクロの柳井さんが理事長を務める柳井正財団やソフトバンクの孫さんが代表理事を務める孫正義育英財団など、海外留学を目指す子が利用できる奨学金制度が増えています。こういった奨学金が増えることは、実力があっても金銭的に留学を諦めていた子どもたちへの後押しにもなりますし、留学生が増える追い風になっています。

——先ほど子どもたちの指向は二極化しているという話がありましたが、こういった海外トップ大学への留学生が増えると、そのギャップは格差社会を助長することに繋がるのでしょうか。

社会全体でどうだと言うのは難しいですが、そういう側面はあるかもしれません。ただ、文部科学省の「日本人の海外留学状況」の数字を見ると短期留学が増えていることが分ります。大学の国際化の中で、各大学からの短期留学・中期留学のプログラムが一番増えているのです。内向きな子と最初から海外のトップ校への留学を希望する子との間で、日本の大学へ進学した後に、短期的に海外を経験する人が増えているということです。早稲田大学等も短期留学に力を入れています。そういう意味では、いろいろなパターンで子どもたちが海外経験をする機会が増えて欲しいと思います。

——Route H 出身者は、海外の大学を卒業してからどんな進路に進む人が多いのでしょうか？

まだ3期生までしか卒業していないので10名ほどですが、日本で就職する子が7割です。日本での就職先は、2/3くらいが外資系企業、残りは海外事業部のある日本企業などです。現地企業への就職は、就労ビザの取得が難しくハードルが高いのですが、それでも数名の就職実績が出てきています。

——日本の大学ももう少し魅力的になれば、海外の大学へ行かなくても同じような経験やスキルが体得できると思うのですが、今後の日本の大学側の課題はどんなことがあると思われるか？

まずは、海外の大学の良い点から考えてみたいと思います。米国のトップ大学は各国から留学生が集まり多様性があるので、切磋琢磨する環境が魅力です。最初の2年はリベラルアーツ教育で文系理系を決めずに学べる点や休学が容易に取得できる点、2つの専攻が出来る点などフレキシブルに学びの場が提供されている点も上げられます。また、一方通行の授業ではなく、ディスカッションが多い授業も魅力だと思います。そういった点を日本の大学も取り入れて行くことは重要かもしれません。もう一つは、世界の最先端の技術を学べる学校は人気がありますので、日本も、防災学など他にはない最先端の研究機関を持つことが強みになると思います。

——日本も海外からの留学生がもっと増えればと思うのですが、なかなか進んでいません。日本の大学も留学生受け入れに力を入れていると思いますが、日本の大学の名前や特徴がなかなか知られていないのが実情です。そこで、「THE 世界大学ランキング」を発表しているイギリスの Times Higher Education とベネッセが組んで、「THE 世界大学ランキング 日本版 2017」を2017年3月に発表しました。世界大学ランキングでは、研究力がコアな指標になるのですが、日本の場合は、教育力に着目したランキングを作成し、第1回は東大が1位、東北大が2位でした。こういった指標で各大学が切磋琢磨し、対外的に特徴をアピールして留学生を呼び込んでいくことも重要になるかと思います。

——今後の Route H の充実について、どのようにお考えでしょうか。

引き続き、海外トップ大学への合格者輩出は取組んで行きたいと思っています。韓国の人口は日本の半分くらいですが、米国留学の実績は日本の5倍くらいありますので、まだまだ日本人の海外留学は増やせると思っています。これを変えて行くには、もっと地方や低学年の子どもたちへ情報発信していくことが重要だと思っています。Route H は、トップ大学への進学を中心にしていますが、この仕事を長くやっていると、日本で知られていない良い大学があることが分ってきますし、そういった大学へ進学した子がグッと伸びている姿も見えています。大学院への留学もあれば、短大・コミュニティカレッジからトップ大学への編入の道もあります。いろいろなロールモデルを紹介することで、海外へ留学する子どもたちを増やしていきたいと思っています。

(了)